



7

竹内鉱業

一時期は、三井・三菱と肩を並べられるほどの名門企業に成長した竹内鉱業は、「工業富国基」の理想の下、自社の利益追求よりも豊かな国づくりを目指しました。後世にたくさんのものを残しましたが、会社自体は経済の荒波に耐えきれず消えていきました。東京市京橋区明石町（現東京都中央区明石町）に所在しました。

鉱山経営の原点

竹内綱は、明治7（1874）年自由民権運動の同志、後藤象二郎から蓬萊社の高島炭鉱の経営を任されます。部下には後に芳谷炭坑（現佐賀県唐津市）の共同経営者となる技術者の高取伊好（これよし）（佐賀藩出身）がいました。

綱は蓬萊社の財務担当をしていた時、会社の経営基盤を安定させるために、蓬萊社の事業の一つとして高島炭鉱の運営を後藤に薦めたと言われています。

綱によって高島炭鉱は順調に業績を上げ、周辺の端島（軍艦島）、大島、香焼の鉱山開発を行います。ところが明治14（1881）年、後藤の事業が失敗し、やむなく炭鉱の全てを三菱の岩崎弥太郎に売却します。

綱はその後も炭鉱経営に情熱を失うことなく、明治18（1885）年、高取伊好らとともに芳谷炭坑を開坑します。この時から綱の長男竹内明太郎が経営に加わります。これが竹内父子の鉱山経営の原点となります。

芳谷炭坑

明治18（1885）年、竹内綱、高取伊好、外村宗次郎らは北波多（現佐賀県唐津市北波多）岸山地区寺ノ谷の寺ノ谷炭坑を買収し、芳谷炭坑合資会社を創業します。芳谷炭坑は綱が社長を、高取が技術長を務め、経営実務を唐津に赴任した明太郎に任せます。明太郎は隣接地を開坑し、また周辺の海軍予備炭田を買収し炭区を拡張します。

明治22（1889）年北波多地区中野に第二坑を開坑し、それ以前の坑区を第一坑とします。明治23（1890）年



芳谷炭坑第三坑遺構（写真提供：北波多の自然と歴史を守る会）

には全長3.2キロメートルに及ぶ専用軽便鉄道を敷設して炭坑と唐津港を結びました。

明治27（1894）年、竹内父子は東京に竹内鉱業株式会社を設立します。同年、芳谷炭坑も株式会社に改編し竹内鉱業の傘下となります。なお、共同経営者だった高取伊好はこのとき独立し、相知炭坑の採掘を始め、後に「肥前の炭鉱王」の異名をとるまでに成功します。

明治39（1906）年、矢代町炭坑を買収して第三坑とし、明太郎経営時代の最盛期を迎えます。記録によると坑区435万坪、炭坑従事者3,116名、斜坑（傾斜している坑道）3本、立坑（垂直に掘られた坑道）1本、年間出炭量495,852トン（1日当たりダンプカー約136台分）がありました。また、炭坑立の芳谷尋常小学校を設置し、病院・劇場・商店などが軒を連ねる巨大な炭坑町を形成していました。

明治42（1909）年、明太郎は芳谷炭坑の機械製造事業を始めるために芳谷炭坑唐津鐵工所を創設します。

明治 44（1911）年、芳谷炭坑の炭坑部門を三菱鉱業へ売却し、鉄工所の運営は竹内鉱業に引き継がれます。大正 5（1916）年、唐津鐵工所は竹内鉱業から分離独立し株式会社唐津鐵工所となります。三菱鉱業へ売却された炭鉱は、昭和 8（1933）年に閉山となります。明太郎の的確な事業転換により、地場産業である唐津鐵工所が残りました。これが現在の株式会社唐津プレシジョンです。

遊泉寺銅山

遊泉寺銅山は享和 7（1807）年 現在の石川県小松市鵜川町に開鉱した銅山で、明治維新までは加賀藩の有力な財源となっていました。明治になり芳谷炭坑の経営の一翼を担う外村宗次郎が採掘権を取得します。そして明治 35（1902）年に竹内鉱業を率いる竹内明太郎の経営に移行します。

竹内鉱業の経営は当時の最先端をいくものでした。明治 40（1907）年には鉱山から小松まで軽便鉄道を敷設し、また、採掘を機械化するために神子清水発電所を建設、精錬方法も溶鉱炉にして、さらに電気分銅所を設置してその規模を拡大しました。明太郎が遊泉寺銅山小学校を建てたのもこの年です。

『遊泉寺銅山精錬所町並図』によると大正 5（1916）年頃は従業員 1,600 人を超え、家族を合わせると 5,000 人が生活し、病院、郵便局、小学校、飲食店、床屋、遊郭、トロッコ駅、鍛冶屋、呉服店、雑貨店等が軒を並べ、一大鉱山町を形成していたことが分かります。

第一次世界大戦バブル期の大正 6（1917）年、竹内鉱業は遊泉寺銅山内に小松鉄工所を、大正 7（1918）年には小松電気製鋼所を創設します。

その後、バブル期の反動ともいえる不況の嵐が鉱山業を直撃し、大正 9（1920）年に遊泉寺銅山が閉山となり、竹内鉱業は苦境に陥ります。こうした状況の中、大正 10（1921）年に小松鉄工所は竹内鉱業から分離独立して株式会社小松製作所となり、小松電気製鋼所を吸収します。昭和 3（1928）年竹内鉱業は解散します



竹内明太郎先生之像（石川県小松市）。公園として整備が進められている遊泉寺銅山跡の入口には記念碑と竹内明太郎の銅像がある。

が、明太郎の慧眼により、遊泉寺銅山なき後も小松に地場産業を残すことが出来ました。

閉山から 70 余年が過ぎ、小松という地方都市に産業を興した先人たちの業績を偲ぶため、平成 3（1991）年、銅山跡入り口付近に遊泉寺銅山跡記念碑が建立されました。そして平成 8（1996）年 記念碑の隣に竹内明太郎像が建立されました（写真）。

現在、遊泉寺銅山跡は小松市が中心になって整備を進めています（21 ページ囲み参照）。これをコマツ（株式会社小松製作所）が全面的に支援する官民一体の事業となっています。入口には記念碑等が建ち並び、駐車場やバイオマストイレが設置された公園になっています。令和 3（2021）年の完成を目指し銅山跡全体の整備が進められています。

その他の鉱山

竹内鉱業は他にも多くの炭鉱を経営していました。そのうち判明しているものを次に挙げます。

● 夕張炭鉱

夕張市鹿島地区にあった炭鉱で、明治 27（1894）年



から三菱鉱業に買収される明治 45（1912）年まで竹内鉱業が運営したと思われます。

● 橋立金山

上杉謙信が採掘していたと伝えられる金山で、現在の新潟県糸魚川市に所在しました。総産金量が約 1.2 トンの比較的小規模な金山でした。最盛期は明治 31(1898)～38(1905) 年で、約 1,000 人の鉱山関係者が働いていました。竹内鉱業の運営期間は不明です。

● 西谷金山

所在地 岐阜県、詳細不明。

● 亀ヶ谷金山

所在地 富山県富山市、詳細不明。

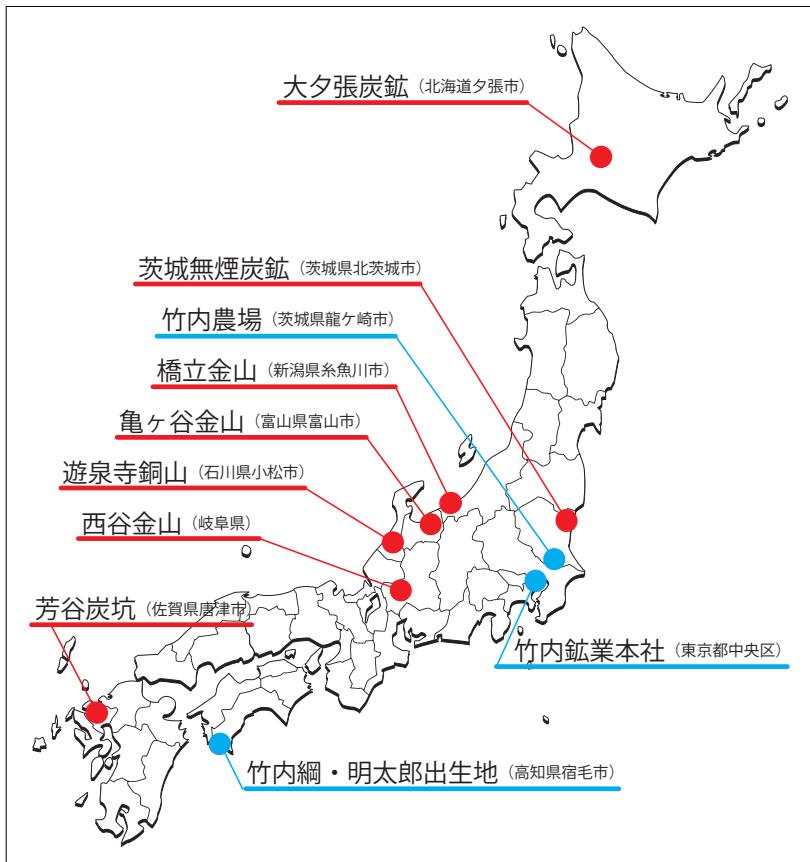
● 茨城無煙炭鉱

15 ページ「茨城無煙炭鉱」参照。

竹内鉱業の終焉

大正 9（1920）年頃から日本経済を襲った戦後不況は遊泉寺銅山を閉山に追い込み、竹内鉱業は急速に力を失います。この厳しい時に竹内鉱業は機械製造部門の小松鉄工所を敢えて切り離し、炭鉱業だけで起死回生を図ります。しかし大正 12（1923）年、関東大震災が首都圏を直撃し、竹内鉱業の石炭貯蔵庫が類焼し大量の石炭を失います。そして大正 14（1925）年、長引く不況で傘下の茨城無煙炭鉱は廃業となり、鉱山の全てが大倉鉱業へ譲渡されます。昭和 2（1927）年、金融恐慌により銀行からの借り入れが出来ず、再生を断念するしかありませんでした。翌年の昭和 3（1928）年、竹内明太郎は失意の中逝去し、竹内鉱業は解散となりました。

明太郎は「鉱山業はいずれ駄目になる。だから地場産業をおこす必要がある」と言い続けました。その通り、鉱山業の竹内鉱業は消滅し、明太郎が興^{おこ}こした地場産業である唐津鐵工所と小松製作所は残りました。しかし、



竹内鉱業関連施設地図（主に『沈黙の巨星—コマツ創業の人・竹内明太郎伝』を基に作成）

それは明太郎が描いた理想とは違い、戦後不況によって竹内鉱業の終焉が突然訪れたのです。

一時期は巨大企業に成長した竹内鉱業ですが、企業の利益より国家の繁栄と人々の幸福を優先した明太郎の経営方針は、平常な経済状況にあってこそ成り立ちますが、不況が長引くと立ち行かなくなるのです。企業の清算手続において、経営トップである明太郎が背負ったものの重さは計り知れません。

竹内鉱業は消滅しましたが、竹内鉱業が残したものを見ると、唐津鐵工所や小松製作所はいうまでもなく、明太郎の支援によって生まれた快進社（日産自動車の前身）や早稲田大学理工科、そして明太郎が創立した高知工業高校も含まれます。これらは総て竹内鉱業の企業活動の中で得た莫大な資金によるものです。

後世に、これだけ大きなものを残し、産業史の片隅に消えた企業は竹内鉱業のほかに存在しません。

遊泉寺銅山跡を訪ねて

令和元（2019）年5月に、ハウジングアンドコミュニティ財団の会合出席のため金沢へ出かけた際、石川県小松市に残る遊泉寺銅山跡を訪ねました。

遊歩道の案内板に沿って一步足を踏み入れると、銅山の麓には用水路が整備され、歩道に沿って石垣（写真1）があり、住宅が建ち並ぶ鉱山街だった様子が伺われます。やがてレンガ造りの真吹炉（写真2 銅の含有量など成分分析に使用された炉）が目につき、銅山跡であることが確認できます。さらに奥に進むと精錬所跡と思われる場所にむき出しとなった煙道が山の傾斜に這ったように伸びていて、その先に高さ20メートルのレンガ造りの大煙突（写真3）が聳えていました。さらに進むと立坑やレンガの遺構が随所にあり、往時を偲ぶことができます。途中からは険しい坂道となりロープが張り巡らされていて、まるで登山の様相です。大木が倒れて道をふさいだ個所もあり、1時間ぐらい歩いて山頂に到着しました。山頂付近にも赤レンガの「巻上げ装置（写真4 精錬所から出たノロ不純物を引き上げた機械の備え付け台）」の遺構がありました。ここからなだらかな下り坂が続き、急ぎ足で下山すると、途中砂山（作業工程で排出した大量の砂を廃棄した場所）や鉱山町の水源跡などの遺構がありました。

約1時間30分掛けてようやく遊泉寺銅山跡遊歩道を完歩しましたが、途中人ひとり出会うことはありませんでした。現在進められている整備が完了すれば、地域の歴史と産業遺産が体感出来る施設として賑わうことでしょう。遊泉寺銅山は竹内明太郎の時代に閉山しているので、遺構や残骸の全ては紛れもなく明太郎が遺したものであり、一步一步、特別な想いで歩きました。



写真 1（左上）石垣（住宅地跡）。 2（右上）真吹炉。 3（左下）巨大煙道。その先には高さ20mの大煙突。 4（右下）巻上げ装置跡。